

1 単元名 ごみとともに生きる ～産業廃棄物最終処分場のあり方を考える～

2 単元設定の背景

教材観

本単元では、従来の小学校社会科で着目されてこなかった産業廃棄物と「産廃場を巡る論争」を教材として取り上げる。令和5年度、環境省の調査によると、産業廃棄物は3億7400万トンが排出されており、その量は一般廃棄物の10倍である。つまり、従来の一般廃棄物をどう減らすのが良いかに終始する社会科授業では、ごみに関わる社会の構造を把握できず、子供たちを無批判に社会化させることになる。また、産業廃棄物の処理方法をめぐっては、依然として多くの地域で対立が常態化している。そのため、「産廃場を巡る論争」について考えることは、ごみとともに生きる社会とはどのような社会であるのがよいかを考えることにつながると言える。以上より、産業廃棄物と「産廃場を巡る論争」は、ごみに関わる社会の構造を適切に把握することを促し、ごみとともに生きる社会のあり方や個人の生き方を探究することができる教材であると考えられる。

子供観

本学級の子供たちは、適切にごみの分別を行い、ごみの少ない生活を送ることが良いと考えている。ごみとは何かと聞くと、「生活で人が使わなくなったもの」「汚くなったもの」といった言葉で説明する。他方で、自分たちが多くのごみを排出するという意識は薄く、産業廃棄物についてはほとんど理解してなかった。よって、産業廃棄物問題への関心もなく、三原市本郷最終処分場について知っている子供はいなかった。そこで、身近な社会問題に心を向けたり、問題解決に向けた対話に向き合おうとしたりする子供を育成したい。

集団観

他者の意見を傾聴し、自分の考えとの違いを受けとめることで、新しい解決策を導き出したり互いに折り合ったりする授業集団を育てる。本学級には、友達の良さを認め合うことができる子供が多い。他方で、自分の意見を伝えることに終始し、友達の意見から学ぶ意識が弱い子供も見られる。また、集団での対話を通して、新しい解決策を考えたり互いに折り合ったりする経験が少ない。その原因は、他者との意見の違いを見出せず、折り合う必要性に迫られていない点にあると考える。そこで、「産廃場を巡る論争」に対する自分の考えをもとに、対立する当事者や授業集団で解決策を対話することで、上記の授業集団を育成したい。

指導観

指導にあたり3点に留意する。1点目が、「産廃場を巡る論争」との出会いである。私たちの生活を便利にするものを作る際に発生するごみが原因であること理解させることで、本問題に関心をもてるようにする。2点目が、本問題の背景にある行政や事業者と地元住民の双方が重視する価値を探究することである。例えば、「広島県が大切にすることは？」や「地元の人が願うことは？」と発問することで、広島県は科学的な安全や法的な判断を、地元住民は丁寧な説明による安心や地域の環境保全といった価値を探究する。3点目が、ごみとともに生きるために大切なことを対話する過程である。自らの考えを表現し、友達の意見を否定せずに傾聴する場を設定することで、自らの考えが変容することを認め、社会と自分の在り方生き方を考えることができるようにする。

3 単元の目標及び計画（全13時間）

■単元の目標

私たちの生活で発生するごみ処理の流れや、ものを作るときに出るごみ処理の流れについて理解したり、「産廃場を巡る論争」への納得解を考えたりする活動を通して、ごみとともに生きる社会のあり方を構想するだけでなく、自らの生き方も考えることができるようにする。

■単元の計画

- 第1次 ごみ処理のしくみを知ろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・7時間
 第2次 「産廃場を巡る論争」を考えよう・・・・・・・・・・・・・・・・4時間
 第3次 ごみとともに生きるとは・・・・・・・・・・・・・・・・・・2時間（本時2／2）

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
ごみ処理と「産廃場」に関する資料や、三原市環境施設課の方の出前授業を通して、ごみ処理のしくみや、本問題の背景にある価値を理解している。	「産廃場」について行政の価値(科学的な安全)と地元住民の価値(社会的安心)を踏まえた上で、ごみとともに生きるために大切なことを表現している。	「産廃場」については、間接的に当事者と、ごみとともに生きるためには授業集団で対話することで、自分の意見の改善を図り続けようとしている。

5 本時の学習

■目標 ごみとともに生きるために大切だと考える視点を伝えたり、友達の意見を傾聴したりする活動を通して、違う立場の意見を取り入れながら自らの考えを更新する。

■レジリエンスを発揮している子供の姿

最初に提示した自分の考えに固執しすぎず、対話の中で違う立場の意見を取り入れるなどして、自らの考えを変容・更新している。

■学習過程 ※ (全) (小) (個) : 学習形態 (全: 全体の場合 小: 小集団 個: 個人) ㊟: 留意点 ㊦: 評価の観点 (方法)

学習事項	子供の活動	教師の働きかけとねらい	集団
1. 学習課題への接近	(1) ごみとともに生きるために重視する考えを確認する。 ・水や自然環境も守る。 ・誰か一人だけに、負担をかけないようにする。	(1) 前時の子供の意見を黒板に貼ることで、多様な考えがあることに気づき、本時の課題を設定できるようにする。	(全) 前時を振り返り、他者の考えとの違いや共通点を捉えられる。
2. 学習課題の設定	(2) 本時の課題を設定する。 ごみとともに生きるために、大切なことは何だろうか？	(2) 子供の意見を黒板に分類することで、環境・公平・責任などの言葉で重視する考えを説明することができるようにする。	(全) 課題を授業集団全員で解決する意欲を高める。
3. 学習課題の追求 (全体による考察)	(3) 課題に対する意見を伝えたり、聞いたりする (全体対話)。 ・ものを作る会社が、ごみを捨てる場所まで責任を持つことが大切。 ・必要ないものは買わないということが大切。 ・東京ではポイ捨てしたら、2000円というニュースを見たから、決まりを作るのも大切。 ・竹之内さんみたいな人の生活を守ることが大切。 ・自分たちが出したごみが問題を起こしていることを知ることが大切。	(3) 意見を批判せず、受け止めるように促すことで、自らの考えを変容・更新できるようにする。 ・「それができるのは誰か？」と発問することで、社会と自分とでできることが異なることを理解できるようにする。 ・「ルールを決めたら解決するか？」と発問することで、制度と情意の双方の視点が重要なことを理解できるようにする。 ・社会と自分、制度と情意の四象限図で板書を整理することで、ごみ問題に対する解決策を模索できるようにする。	(全) 自分の意見を明確に伝えられるようにする。
(個による考察)	(4) 対話を受けて、自らの意見を変容・更新する。 ・自分にできることが大切だと思っていたけれど、ものを作る会社も責任をもってごみを少なく取組をしてくれないと困るな。 ・エコマーク商品は、ごみなどの環境に配慮している証拠だから、その商品を買いたい。	(4) ノートに自らの意見を修正する時間や、友達の納得できた意見にネームカードを貼る時間をとることで、意見の深まりや変容を実感できるようにする。 ㊟ 立場を変えた子供や意見の深まりが見られる子供を価値づけることにより、意見の固執を防ぐ。	(個) 対話を受け、意見の変容や更新を実感できるようにする。
4. 本時のまとめ	(5) 教師の考えを聞き、本時のまとめを記述する。 ・なぜ、三原市清掃工場では反対がなかったの？ ・三原市清掃工場では、計画してから常に住民へ工場の安全性を説明し続けていたのだな。 ・問題に関わる人が対話し続けることも欠かせない点だな。	(5) 三原市清掃工場・埋立地では反対運動が行っていない事実を確認することで、社会でも継続した対話が有効であることを理解できるようにする。 ㊦ 学習内容や友達との対話を通して、ごみとともに生きるために大切な考えを整理している。(ノート)	(個) → (全) ある子供の疑問に対する教師の考えを提示することで、対話の重要性を理解できるようにする。